

目加田 誠著

屈 原



岩 波 新 書

663



目加田 誠著

屈 原

岩 波 新 書

663

目加田 誠

1904年山口県に生まれる

1929年東京大学文学部卒業

専攻—中国文学

現在—九州大学名誉教授

早稲田大学文学部教授

著書—「新釈詩経」(岩波新書)

「詩経・楚辞」「杜甫」

「唐詩選」「風雅集」

「洛神の賦」その他

屈 原

岩波新書(青版) 663

1967年12月20日 第1刷発行 ©

1968年3月10日 第2刷発行



著 者 め か だ まこと
目 加 田 誠

東京都千代田区神田一ツ橋 2—3

発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都青梅市根ヶ布 385

印刷者 白 井 倉 之 助

発行所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
神田一ツ橋2—3 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・桂川製本



屈原（部分） 横山大観

目

次



秋蘭の図

はじめに——端午の節句と屈原——	1
------------------	---

I 屈原の時代と生涯	7
------------	---

1 古代中国における南北文学	8
2 楚国の成立	11
3 屈原の時代	16
4 史記の屈原伝	17
5 屈原の出生と少壮時代	25
6 屈原 王に疎んぜられること	31
7 屈原 江南に放逐されること	50
8 屈原 汨羅に投身のこと	73
9 楚国の滅亡	83

II 楚 辞

1	楚辞の編纂	88
2	離 騷	95
3	天 問	117
4	九 歌	137
5	招 魂	165

III よみがえる屈原文学

1	後世への影響	192
2	民話の中の屈原	200
	地図・略年表	207
	あとがき	209

はじめに
——端午の節句と屈原——



屈原(清南薰殿藏「歷代聖賢名人像本」より)

端午の節句にちまきを食べるのは、わが国でも古くからの習わしで、子供の頃、母の作ってくれた端午のちまきは、なつかしい思い出の一つである。北京に居た時も、この日、形は日本のものとは少しちがった三角形で、中に果実の餡あんの入ったちまきをもらったことがある。鯉のぼりとちまき、といえば、すぐに五月の青空と、さわやかな新緑の色とを想い浮べるが、旧暦の五月五日といえば、実は暑い盛りである。端午とは月の始めの午の日で、その午の日が後に五日に定まったのは、三月上巳じよさしの節句がやがて三月三日にきまってきたようなものである。

中国の昔、節句になると、水辺に出て、禊みそぎをして汚れた気をはらい、薬草を採って病気を避けるという習俗があり、後世はこれが三月三日の曲水流觴きよくすいりゆうしやう（水の流れに杯を浮べて詩を作ること）の遊びとなったたり、五月五日の競渡（舟漕ぎの競争）となったり、九月九日の登高とうこう（茱萸しゆゆをとって、丘に登ぼって遊ぶ）の行事となったりした。

六朝梁りやうの宗懐そうりん（五〇〇—五六三）の書いた『荊楚歲時記けいそさいじ』によれば、五月五日を浴蘭節よくらんせつ（蘭の香をつけた湯に浴する日）といい、人々は草摘みにゆき艾よもぎをとって、門戸の上に懸けて邪気を払い、水上では舟を漕いで競争し、人々は川辺に集まってこれを観る。俗説に、この日は屈原が汨羅べきらに身を投げた日で、その靈魂を救うという、とあり、また同じく五日に、五色の糸を臂ひじにかけて

禍をさけるというのは、日本でする端午の五色の吹き流しにもあるいは関係があるかもしれぬ。また、夏至げしの日、糒ちまき（二名角黍かくじよ。粽とも書く）を食べる、とあるが、この夏至の行事がいつのまにか端午の行事と混同したものらしい。

ところが梁の呉均ごきん（四六九—五二〇）の『続齊諧記』には、「屈原が五月五日に汨羅の水に身を投げたので、楚国の人々はこれを憐れみ、この日になると、竹の筒に米を入れ、水に投げてこれを祭った。漢の建武年間（一一三—一四四）長沙の欧回おうかいという人の前に、日中一人の男が現われ、自分は三閭大夫りよ（屈原）であるといい、欧回に向かっていうには、『君がいつも祭ってくれるのはまことにありがたい。ただこれまで贈られた食物は、皆蛟竜こうりゆうにぬすまれた。今後もし恵まれるなら、楝おうちの葉でその上を塞ぎ、綵糸あやいとで纏まとってほしい。この二つの物は蛟竜がこわがるものだから』と。回はその言葉通りにした。今日、粽に楝の葉と五色の糸をつかうのは、この名残りである』と言っている。してみれば、端午に粽を作つくって屈原を祭るといふ民俗はずいぶん前からあったことであろう。

だいたい五月は悪い月であり、端午は特に凶日であるとされる。戦国時代、孟嘗君もうしようくん（齊の人。姓は田、名は文。つねに食客数千人を養っていた）が五月五日に生れて、その日が悪日なので捨てられようとしたことが漢の司馬遷の『史記』に見え、その後も五月五日生れを不吉なものとした

ことは史書に多い。あるいはこの日陰陽がたたかい、陽が極まって陰が生ずるといわれるところから考えられたことであろうか。

『世説新語注』(六朝の宋の劉義慶〔四〇三—四四四〕が著わし、劉孝標が注を加えたもの)に「会稽典録」を引いて、

孝女曹娥は会稽(浙江省)上虞の人。父の盱が歌が上手で神を楽しませた。漢安二年(『後漢書』には、五月五日)伍君神を迎えようとして水に溺れてその屍が見えなくなった。曹娥は年十四であったが、父の死を号哭して、瓜を江中に投じ、父がここに在るならば瓜よ沈め、と。十七日経って瓜がたまたま沈んだ。娥はつづいて江に身を投げて死んだ。云々。

伍君神とは春秋時代の伍子胥(楚の人。父と兄が楚王に殺され、呉に逃げてきて、呉王闔閭をたすけて楚を伐って父兄の仇をむくいた。闔閭の後、その子夫差に仕えて越を伐って大功があった)のことで、夫差が讒言を信じたため、恨みをのんで自殺した。夫差は怒ってその屍を革袋に入れて钱塘江に投げ入れた。呉国の人々は憐れんでこれを祭ったと伝えられる。

『後漢書烈女伝』には曹娥の父は絃歌をよくする巫祝であったと書かれている。五月五日に江のほとりで水神を祭る風習があったのであろうし、一方、伍子胥の死は屈原の死とその悲劇が似かよっているのではないか。ところがそのほかに水に關係なさそうな伝説にも、春秋時代晋

の文公が諸国を放浪していた際に大功のあった介子綏かいしすい（推とも書く）を、文公が帰国して即位した後その功を忘れて顧みなかったので、介子綏は恨んで山に入り、文公が後悔して迎えをだしたが山を出ず、やむをえず山を焼いて彼を求めたが、介子綏はとうとう山の木を抱いたまま焼死した。文公はこれを悲しんで、その日人民は火を用いることを禁じたという、有名な寒食かんしょく節の説話（冬至後一〇五日、火を用いることを三日間禁じる）が、後漢の蔡邕さいよく（一三三—一九二）の「琴操きんそう」では、五月五日ということになっているのである。私が子供の頃、瀬戸内海の海岸で友人と舟に乗って遊んでいたとき、友人の一人が、この中に五月五日生れの者はいないか、いたら竜が水の中に引き込むぞ、といっておどしたことを覚えている。瀬戸内海の沿岸地方では、三月三日に海辺の丘に弁当を持って遊びにゆくことがあり、これはあの登高の行事に似たものであるが、この五月五日の水神の話も、いつか中国から日本に伝わっていたものと思われる。

こうして考えてゆくと、屈原が五月五日に投水したということには何ら証拠はないが、この日水中の竜神を祭る、という江南の習俗がいつのまにか屈原と結びついたものだろう。そして屈原にしても、伍子胥ごしよにしても、また介子綏かいしすいにしても、皆その功を報いられず恨みをのんで死んだ人物で、それを後世の人が哀れみ傷んで祭ったという点は共通する。そのうち特に屈原の投水には、ちまきの行事なども結びつき、五月五日がだんだん屈原をまつる日にきまってきた

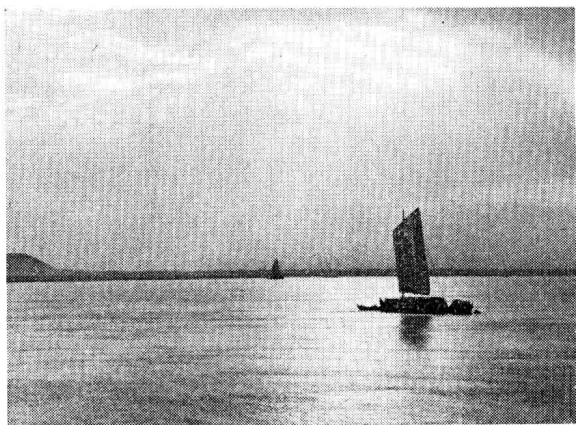
ものらしい。それというのも屈原の死がどんなに後世の人々に傷まれたか、どんなに後世の人が屈原を敬愛したかと思われる。いったいそれは何故であろうか。

屈原の伝記は後述のようにひどくあいまいである。かつては屈原その人の存在を疑う説もあった。しかしその死からおよそ百数十年を経た『史記』に、不十分なが伝が書かれていることから考えても、その人の存在を全然抹殺するのは軽率であろう。しかし、彼が作ったという中国古典文学の代表作品であり、屈原の名を不朽にした「離騷」その他の文学も、はたして彼がその真の作者であるかどうかを疑う学者もある。したがって彼の生涯を史實的に考証してもたしかな結論は出ない。その死の年月についても、いろいろな学者が説をなしているが、それも全く臆測にすぎぬものである。

しかし、屈原という人が、楚国の危機に当って、固い信念をもって烈しく国を愛し民を愛し、世の汚れにそまらず、一身を潔きよくして、ざんしや讒者のために陥れられ、ついに水に投じて死んだことへの同情、またその作品とされる『楚辞』の、絢爛たる文辞や香り高い浪漫精神への愛着によって、二千年来中国の人々の胸の中に生きつづけてきている、その屈原という人の姿を今からここに語って見たいと思う。

I

屈原の時代と生涯



洞 庭 湖(故名取洋之助撮影)

1 古代中国における南北文学

広東から北京に向って飛ぶ上空から眺めると、湖南の衡陽こうようから長沙にかかるころ、前面に広漠たる洞庭湖どうていこの水面が太陽にかがやいて、それがどこまで広がっているのか、果ては雲につらなつて見え分たぬ。やがてその蔽おほわれた平野の間に、滔々たる長江の濁流が望まれて、まもなく武昌、漢口の上空にさしかかる。この地方いちめんに水びたしで、まことに古来、雲夢うんぼうの沢たくといわれた水郷である。この一帯が、古代楚国の一部であった。

これに反して、北京から山西省を経て、陝西省西安に向う途中は、山また山で、太行山脈をこえると、眼下に黄土の層があきらかに地の理すじをあらわし、汾水ふんを経てやがて広くひろがる黄河の流れを下に見て、再びたなわなる山脈の上を飛んで陝西の平野に入る。

南北の自然の状況が、このように著しい対照を見せているということは、古代中国において、南北の文化に大きな差違があったことの必然性を思わすのでなくてなんであろう。北方黄河の流域に殷いんの王朝が栄え、やがて西紀前十二世紀のころ、陝西地方に起った周朝が今の西安附近

に都して、東方に進出し、洛陽に東都を作り、黃河流域一帯を統治し、中原に偉大な周の文化を築き上げた。

殷人は巫を好み、その文化は今日でいえば迷信にみちたものだったというが、これを驅逐した周の文化は、きわめて現実的であり、天命をつつしみ、政治に努力して民意を失うことをおそれ、天に日月星辰の文が整然としてかがやくように、地上に法度典章をしいて、燦然たる人の文を打ち立てようとした。中国の歴史は、この周の文化を伝えるに専らで、その古い記録はいよいよ修飾されて儒教の經典にしるされ、後世の政治や道德の規範となった。その祖宗の祭りの歌や、朝廷の饗宴の歌、これに各国の風氣を示す地方の民謡までを集録したものが、『詩經』として、經典の一つにかぞえられて、後世に重んぜられているのである。

しかしその頃、淮水から長江流域一帯は、ただ荊舒の蛮夷としてわずかに記録に現われ、周朝の勢力がこの蛮夷を膺懲した功績ばかりを誇大にのべている。けれども春秋時代になると、その頃の大きな戦争は、いつも南方の楚の勢力が、北方に進出するのを抑えるために、中原の諸侯が連合して、これとたたかう戦争ばかりだといっても過言ではない。

いつの頃から南方、楚の民族の力がそんなに大きくなったのか、その文化の程度はどんなであったか、これを知ることとは容易でない。今はわずか一部の考古学の発掘が行われて、いくぶ

んその様相が察せられるとはいふものの、まだまだ充分ではない。ただこの戦国時代に楚国に起った、『楚辞』と称される文学が伝わることによって、周朝文化とは、その影響を受けながらも多分に質を異にする、きわめて華やかな文化が楚国に開けてきていたことを察しうるのである。

儒教の經典であるところの、『易』『書』『詩』『礼』『春秋』はいわば古代北方中国に栄えた文化を後世に伝えるものである。『易』は陰陽循環の理を明らかにして人間の行動をみちびき、『書』は意志強い古代の政治道徳を教え、『礼』は秩序ある社会生活の規範を示し、『春秋』は歴史の記述に是非の判断を含めて簡潔にのべ、そして『詩』はいわゆる「楽しんで淫せざる」との生活の苦しみと素朴な愛のうたとを伝えるものとされる。その詩はどこまでも現実に即して、空想的な要素はほとんど無い。

これに対して南方楚国の歌として伝わる『楚辞』は、『詩経』が集団的な樂歌であったのに対して、そこに屈原という名によって代表される偉大な作家があらわれ、それについて宋玉と景差けいさとかいう人々があり、始めて個人の作家による個性的な文学が生れてきたのである。

屈原の漂泊したという洞庭のほとりは、神話伝説にみちた地方であった。洞庭の渚には、夕